紀伊半島沿岸の戦争遺跡と現状について

山　根　惇　史*

The war ruins and current situation in the coast of Kii Peninsula

Atsushi YAMANE

要　旨

本稿では、2019年度の調査報告書「和歌山県沿岸の戦争遺跡と現状について」（山根惇史 2020）の続編とし、紀伊半島沿岸の紀中～紀南地域および志摩半島に遺る自然に埋もれ忘れ去られつつある、本土防空関連の施設跡である戦争遺跡を中心に現地調査を行った成果を報告するものである。

現地調査結果およびレーザー距離計による簡易実測値をもとに、それぞれの戦争遺跡にどの程度遺構が遺っているかがわかるように簡単な分布地図を作成した。

調査結果から、戦後75年を経ても遺構が遺る遺跡が多いことが判明した。しかし当時を知る住民の方や関係者の多くが鬼籍に入られ、文献史料が少ない遺跡を調査することの難しさや遺跡の存在とその歴史を後世へ継承していくことの重要さを再確認した。

キーワード：戦争遺跡、三重県、和歌山県、紀伊半島、太平洋戦争

Ⅰ　はじめに

本稿は2019年度の調査報告書「和歌山県沿岸の戦争遺跡と現状について」（山根惇史 2020）の続編という位置づけである。2019年度の調査報告書も奈良大学リポジトリにて公開されているので合わせて参照されたい。

紀伊半島沿岸は、三重県側は伊勢湾を経て中京工業地帯への入り口であり、和歌山県側は紀伊水道および京阪神都市圏および阪神工業地帯への入り口であるため連合国軍機の進入経路であった。紀伊半島沿岸には陸軍の対空レーダーである超短波警戒機および聴音機や海軍の対空・対艦レーダーである電波探信儀を運用する施設が建設され高射砲や沿岸砲も多数配備されたほか、民間の防空監視哨も各市町村ごとに設置された。

こうしたなか、陸海軍の施設は当時極秘であったことから地域の住民であっても高齢者を中心に断片的な情報が残されている程度であり、民間の防空監視哨も75年という年月を経て遺跡の存在が忘れ去られつつある。戦後の農地化や開発に伴い多くの遺跡が破壊された今日では市町村史

令和２年９月16日受理　*文学研究科文化財史料学専攻　研究生

などわずかに残る史料と当時を知る住民の証言が頼りという状況である。

Ⅱ　紀伊半島沿岸の戦争遺跡分布について

三重県および和歌山県ともに軍港等の主要港湾施設や都市部、工業地帯の防衛を目的として沿岸部付近の高地や岬を中心に陸海軍の対空・対艦レーダー施設や聴音機が配備されていた。連合国軍の上陸が想定された湾内付近には岸壁や主要道路沿いを中心に多数のトーチカが築かれ、砲台や機関銃陣地、指揮所などが存在した。一部地域には艦艇を用いた特別攻撃隊の基地や水上飛行場なども存在した。本稿ではこれらのうち本土防空を目的として配備されていた陸海軍の対空・対艦レーダー施設を中心に調査を行った。

Ⅲ　陸海軍のレーダーについて

陸軍は主に本土全般の防空を担っていたため沿岸部に超短波警戒機と呼ばれる対空レーダーを多数配備していた。超短波警戒機には超短波警戒機甲（以下、警戒機甲）と超短波警戒機乙（以下、警戒機乙）の２方式の対空レーダーがあり、警戒機甲はドップラーレーダーで距離を隔てて設置された送信所と受信所の間を航空機が通過すると受信所のスピーカーから音によって通過を探知できた。

警戒機乙はパルスレーダーであった。警戒機乙は陸上固定配備の要地用と車載式の野戦用、船舶用の３機種が存在した。警戒機乙要地用の特徴として１か所の送信所に対し複数か所の受信所が送信所を囲むように設置された。

海軍は主に軍港や主要港などの港湾施設および各鎮守府、各海軍基地の防空を担っていたため沿岸部かつ軍港や各海軍基地の周辺に電波探信儀と呼ばれる対空・対艦のパルスレーダーを多数配備していた。

陸海軍のレーダーともに最新鋭兵器だったが市民に対して科学教育の一環としてレーダーに関する報道[1)]や専門誌への掲載[2)]は行われており、レーダーは電波警戒機や電波探知機（電探）、ラジオロケーターなどと呼称されていた。

Ⅳ　戦争遺跡の調査について

多くの遺跡は、近代の遺跡ではあるが戦争遺跡という特性上、その多くは草木が生い茂る山中や沿岸部の奥深くに埋没している。今回の調査では、昨年度の調査と同様に遺構の探索および簡易実測、写真撮影を行った。簡易実測ではBOSCH製レーザー距離計ZAMO２を用いた。遺跡および遺構の位置情報は携帯電話のGPS測量機能を用いた。これらの調査結果をもとに国土地理院の地理院地図（電子国土Web）を利用した遺構分布図もしくは遺構概略図を作成した。本来はすべての遺跡についての遺構分布図および遺構概略図を掲載すべきであるが紙面の都合上、一部の遺跡はどちらか一方のみの掲載とした。

遺構分布図には国土地理院の傾斜量図を用い、遺構概略図には国土地理院の淡色地図をもとに作図し遺構の位置が分りやすいよう留意した。作図は地理院地図（電子国土Web）の作図機能およびMicrosoft Paintを用いた。図中の実線は遺構および敷地境界線、太い点線は自動車が通行できる道路、細い点線は歩道、破線は海岸線である。

各図中の遺構名は、遺構の位置や形状などから私自身が推測したものである。また陸軍施設の遺跡は施設の正式名称を記した史料を閲覧することができず不明なため仮称とする。

Ⅴ　三重県の戦争遺跡について

三重県では、３か所の遺跡の調査を行った結果それぞれの遺跡にて遺構を確認することができた（図１）。また三重県内には今回調査を行った３か所の遺跡以外にも以下の陸軍のレーダー施設が存在していたが今回の調査は見送った。

・南牟婁郡御浜町に神志山基地[3)]
・志摩基地[4)]
・尾鷲市九鬼町に警戒機甲を装備した九鬼基地[5)]
・三重県熊野市に警戒機乙を装備した木本基地[6)]

なお志摩基地および神志山基地については正確な所在地が不明であり、特に志摩基地に関しては『東海軍管区の防空陣地』（清水啓介 2017）によると志摩市大王町船越の退治埼に受信アンテナ基礎等の遺構が遺されており、志摩情報隊基地（仮称）とされているが波切基地から直線距離で約2000mしか離れていないことから波切基地の分屯所である可能性が考えられる（千葉県銚子市に存在した銚子基地から約3000m～8000m離れた位置に存在した超短波警戒機陣地を同基地の分屯所としている[7)]）。よって旧志摩郡もしくは旧志摩町のどちらかに存在した可能性が高く、『戦史叢書第019巻　本土防空作戦　附図第４　本土（台湾を除く）電波警戒機配置要図』（防衛庁防衛研修所戦史室 1968）によると波切基地より北側、志摩半島北端付近に印が打たれていることから志摩市阿児町の安乗埼灯台周辺に存在していた可能性が考えられる。

三重県のレーダー施設が三重県南部に集中している理由としては伊勢市以北の沿岸部は標高の低い平野が多くレーダーの設置に向かないことが考えられる。その反面、三重県の平野部には陸海軍の飛行場が数多く建設された。以下、各遺跡について概観する。

A地点　伊勢防備隊　大王埼特設見張所

遺跡の所在地は三重県志摩市大王町の大王埼灯台北側高地である。

大王埼には日露戦争期に望楼が設置されており[8)] 日露戦争後の大正３年４月からは望楼を一時的に閉鎖し三重県の気象観測用測候所として利用されていた[9)]。昭和16年12月８日に海軍見張所として再開設され[10)]、昭和18年５月に電波探信儀が設置された[11)]。近隣住民によると兵舎跡は現在海上保安庁の大王埼照射灯（旧ディファレンシャルGPS局舎）地区とのことである。

終戦時の装備は２式１号電波探信儀１型改３（以下113号）、２式１号電波探信儀２型（以下12号）、仮称３式１号電波探信儀１型（以下11K）、３式１号電波探信儀３形（以下13号）の４機種

でいずれも対空用レーダーである[12]。遺構概略図は（図２）である。終戦直後に撮影された航空写真[13] から海軍敷地を推測し、現地調査の結果をもとに作成した。

遺構はコンクリート製の半地下式電波探信儀室（写真１、写真２）と電波探信儀のアンテナ支柱用アンカーケーブル基礎とみられるコンクリート構造物、土塁に囲まれた方形窪地およびコンクリート製の指揮所跡を休憩所に転用したとみられる建築物（写真３）が確認された。

波切神社の宮司によると付近には海軍省と書かれた境界柱が点在しており、またかつては漁港周辺に多数の地下壕が掘られていたが現在入り口は閉塞されているとのことである。

半地下式電波探信儀室は内部、外部ともに完存しており全国的にも貴重な遺構と思われる。半地下式の電波探信儀室を持つ機種としてはアンテナと電波探信儀室が一体構造の113号および12号、初期型を除く機種であり、大王埼遊園の平地に遺るコンクリート構造物が13号のアンテナ用とみられることから、12号後期型および11Kの２機種が考えられる。電波探信儀室上部は木に覆われて確認することができなかったが、アンテナの基礎が遺されていると思われる。

また13号のアンテナ設置位置と見られる平地に隣接する土塁に囲まれた窪地は13号の電波探信儀室跡の可能性が考えられる。指揮所と見られる建築物は戦後、観光用の休憩所として利用されていたとみられる痕跡があったが、コンクリートが老朽化しており立入禁止となっている。

Ｂ地点　第33航空情報隊　多度基地

遺跡の所在地は三重県桑名市多度町の多度山の山頂から中腹である。

昭和18年夏頃に中部軍防空情報隊（中部7437部隊）警戒隊の波隊多度小隊[14] として開設され、昭和20年６月30日に新設された第33航空情報隊[15] の本部基地となった[16]。

装備は警戒機乙要地用[17] および基地防衛用の機関砲陣地である。山頂から中腹、横山古墳周辺にかけて警戒機乙が設置され本部隊舎として多度国民学校が接収され兵舎は中腹に位置していたとされている[18]。遺構分布図は（図３）である。戦時中に撮影された航空写真[19] から陸軍用地を推測し、現地調査と住民の方の証言をもとに作成した。

遺構としては散歩に来られていた地元の方が高射砲台跡（写真４）と鉄条網柱跡、警戒機跡と呼ばれていた地点および警戒機乙の配線を通したと思われる電纜溝跡と地下壕跡が確認できた。警戒機跡と呼ばれている場所では戦後、鉄屑を拾いに来る人がいたという。戦後の開発によって遺構は僅かに遺る程度である。

Ｃ地点　第33航空情報隊　波切基地

遺跡の所在地は三重県志摩市大王町波切である。

昭和18年夏頃に中部軍防空情報隊（中部7437部隊）警戒隊の波隊波切小隊として開設され[20]、昭和20年６月30日に新設された第33航空情報隊波隊所属となった。

装備は警戒機乙要地用である。国道付近に送信所が２か所、分散配置された受信所が９か所と対空監視所が１か所あり現在の電子部品工場付近に兵舎があったとされる[21]。これらの情報を得る前に終戦直後に撮影された航空写真[22] を解析し調査を行ったところ波切市街地南側の山中に何らかの施設跡が確認でき、現地調査したところ複数の土塁や円形・方形窪地跡、地下壕跡（写真

５）や電纜溝跡などが確認できた。しかしアンテナの基礎等は確認できず、志摩周辺は本土決戦に備えた塹壕等が多数存在したので断定することはできないが立地から９か所存在した受信所の一部である可能性が高いと思われる。調査および史料に基づき作成した遺構分布図は（図４）である。

Ⅵ　和歌山県の戦争遺跡について

和歌山県では、５か所の遺跡の調査を行った結果それぞれの遺跡にて遺構を確認した（図５）。和歌山県では2019年度の調査報告書にて海軍の対空・対艦レーダー施設を中心に調査を行ったため、本稿では2019年度には調査を行えなかった陸軍の対空レーダー施設を中心に現地調査を行った。2019年度に調査を行った、海軍日ノ御埼特設見張所、瀬戸崎防備衛所、白浜・臨海の海軍部隊、海軍市江埼特設見張所、江須埼特設見張所、潮岬特設見張所に関しては「和歌山県沿岸の戦争遺跡と現状について」（山根惇史 2020）を参照されたい。以下、各遺跡について概観する。

Ｄ地点　西山地下壕

遺跡の所在地は和歌山県日高郡日高町である。

日高町と美浜町の境界に近い西山では戦時中、陸軍が軍用道路を建設し防空壕やトーチカ作りを行い、西山から陸軍部隊が駐屯していた志賀小学校まで電話線も敷設されたようである[23]。現地調査をもとに作成した遺跡分布図は（図６）である。

遺構としては現在は西山山頂の道路沿いに地下壕跡（写真６）や地下壕の崩落跡とみられる溝（写真７）、電話線を通したと思われる電纜溝が確認された。軍用道路は登山道および放送設備施設の点検道へ転用されている。西山は標高約328.7ｍと高く見晴らしが良い山である。周囲には標高337.6ｍ地点や標高270ｍ前後の地点もあり、いずれも旧軍用道路沿いに位置するため地下壕跡などが遺されている可能性が高い。

第35航空情報隊では御坊に警戒機乙要地用を配備する計画であった[24]が工事中に終戦となった。遺構の状況から砲台を築いたとは考えにくく、警戒機乙は西山へ配備する予定地であったと考えられる。なお昭和17年頃には美浜町三尾に航空情報隊が配置されたが[25]兵士の人数からこの配備計画とは別の施設と思われる（後述）。

Ｅ地点　三尾防空監視哨

遺跡の所在地は美浜町三尾の光明寺裏手の山の中腹である。

昭和13年頃に三尾村青年団員による民間の防空監視哨が設置され[26]、太平洋戦争開戦直前には陸軍大阪通信隊の防空監視所も隣に建てられたという[27]。

この遺跡では三尾にて郷土史を研究されている三尾雅信氏と共に現地調査を行った。『日高町誌 下巻』（日高町 1977）によるとこの防空監視哨（町史では対空看視所と記載）は空襲にて焼失とのことであったが、三尾漁業協同組合の組合長である村尾敏一氏によると戦後、日ノ御埼の海軍日ノ御埼特設見張所とともに爆破解体されたとのことであった。遺構分布図は（図７）、遺

構概略図は（図８）である。終戦直後に撮影された航空写真[28]から陸軍用地を推測し、現地調査にて得られた情報をもとに作成した。

遺構としては、北東側をのぞき土塁状に積み上げた石垣にて囲まれた監視哨の区画が完存しており、２棟の建造物跡の基礎（写真８）や土管が遺されていた。石垣の上に建造物の一部とみられるコンクリート片が積み重ねられていた。北東側は山の岩盤を掘削したとみられ、一部、角材を固定したとみられる穴が設けられていた。また、防空監視哨区画よりやや北東の平坦地には方形窪地も見られた（写真９）。方形窪地は位置から貯水タンクもしくは聴音壕を設置していた跡、陸軍施設の一部ではないかと思われる。

遺物として落ち葉に埋もれたサイダー瓶１本とビール瓶１本を発見し位置を記録したうえで回収した（写真10）。サイダー瓶は大日本麥酒株式会社のもので、ビール瓶はキリンビールのものであったが、それぞれ右横書きであった。瓶製品に詳しい方に年代の推定をお願いしたところ、戦中は嗜好品であるこれらの飲料は流通し難くなり、かつ透明なガラス瓶は減少傾向とのことで防空監視哨が設置された頃のものである可能性が高いと思われる。

防空監視哨よりやや南西側の斜面にて倒壊した鉄塔と阪国電機製モーターサイレンを確認した（写真11）。また防空監視哨には空襲警報を知らせるサイレンが設置されたとのことで[29]、当時のものではないかと期待されたがサイレンの銘板に記された製造番号を製造元に照会したところ昭和55年製とのことである。当時を知る住民によるとサイレンは手動式とのことである。

なお大阪通信隊は防空監視哨にて得た情報を中部軍司令部へ無線にて送信することが役割と思われる。また『美浜町史　下巻』（美浜町 1991）には大阪通信隊とは別に昭和17年頃、兵士数名の航空情報隊が配置されたとの記述があるが[30]、大阪通信隊とは別にとされていることから三尾防空監視哨とは別の場所に存在した可能性が考えられる。

昭和17年ならば警戒機甲は既に各地で運用されており、警戒機乙の配備が始まった時期であるが三尾に警戒機が配備されていたとの記録は今のところ無い。三尾に存在していた航空情報隊は兵士の規模から聴音機を装備とする部隊ではないかと思われるが詳細は現在の所不明であり、今後も調査を続ける予定である。

Ｆ地点　第35航空情報隊　白浜基地

遺跡の所在地は白浜町の平草原公園周辺である。

平草原には昭和14年に青年学校生徒および在郷軍人会による民間の防空監視哨が設置された[31]。昭和18年７月21日に平草原への陸軍駐屯が決定し昭和18年８月５日に陸軍の駐屯部隊が到着した[32]。『白浜町史　本編　下巻１』（白浜町 1984）によると昭和19年頃に中部7437部隊や潮隊と言われ出したようで中部軍防空情報隊潮隊田辺小隊の白浜基地となった模様である[33]。装備は警戒機乙要地用および警戒機甲受信機である。

なお『白浜町史　本編　下巻１』（白浜町 1984）によると民間の防空監視哨は昭和20年３月に潮部隊が電波探知機を設置するまで続けられたとあるが、少なくとも昭和19年には警戒機を配備していたと考えられる。また町史には昭和20年３月に平草原のレーダーを運用する防空監視隊が椿に移転したとされているが[34]、紀州博物館にて学芸員をされていた玉田伝一郎氏によると椿に

移転したのは民間の防空監視員であり、当時椿にて防空監視員をされていた方の証言では陸軍部隊が椿に移転したという話は耳にしていないとのことである。調査をもとに作成した遺構分布図は（図９）、遺構概略図は（図10）である。

遺構としては平草原公園北側の白浜スカイライン沿いに『白浜町史　本編　下巻１』（白浜町 1984）に記述されている発電機および警戒機用の地下壕跡が２か所確認できた（写真12）。また平草原公園内に拳大から約30㎝まで幅広い大きさのコンクリート片が堆積している場所が複数確認された。付近には板ガラス片が散乱している箇所もあり、いずれも白浜基地の施設を爆破解体した残骸と考えられる。

さらに付近には幅約1.2m、高さ40㎝のコンクリート壁や幅約8.5m、高さ約85㎝、奥行き約1.2mと巨大なコンクリート製構造物（写真13）が確認された。付近の丘には埋め立てられた地下壕跡と思われる場所やコンクリート製の建物基礎、便槽跡（写真14）などが確認された。これらの遺構が確認された場所は町史に記述されている兵舎跡と思われる。平草原中腹のやや小高い部分に位置するため警戒機乙の受信所が存在した可能性も高いと考えられる。また玉田伝一郎氏や平草原公園の職員によると現在立ち入ることができない平草原公園駐車場の南東側斜面にも地下壕が遺されているとのことである。

Ｇ地点　第35航空情報隊　潮岬基地

遺跡の所在地は串本町塔石である。

『串本町史　通史編』（串本町 1995）によると昭和18年夏、潮岬の塔石地区に警戒機基地と警戒機を防衛する高射砲の小部隊が配備されたようである[35]。遺構分布図は（図11）である。終戦直後に撮影された航空写真[36]および住民の方の証言をもとに作成した。主要装備は警戒機乙要地用および警戒機甲受信機である。串本町教育委員会の田村浩平氏によると塔石地区には縦穴状の地下壕が２か所残存しているという。また住民の方によると縦穴の地下壕は長さ６ｍから７ｍほどで最下部は水平方向に伸びており谷側へ開口していたとのことである。縦穴は数年前に埋め立てられたとのことである。この縦穴は陸海軍レーダー施設によく見られた形式であり、水平方向の地下壕はレーダーの送受信室として使用され縦穴からアンテナを突き出して運用されていた。

住民の方によると兵舎地区は現在テレビの送信所や防災ヘリポートがある辺りで兵舎付近には丸太を数本組み合わせた背の高いアンテナが２、３本存在していたという。米軍機はこのアンテナを目印に飛行しているように見えたという[37]。兵舎地区からやや南西側の耕作放棄地には陸軍の機関銃陣地が存在したとのことである。また兵舎地区の東側斜面にて地下壕跡を発見した（写真15）。

以上の話から背の高いアンテナは警戒機乙の送信所および警戒機甲の受信所の可能性が高い。住民の方が記憶にないという警戒機乙の受信アンテナは送信アンテナよりも小型であり目立たなかったか、別の場所に設置していたため目撃されていない可能性が高いと思われる。

縦穴の地下壕があるとされている場所は住民によるとマダニやマムシ、猪が生息しており夏場は危険であるとのことで調査は断念した。冬季に再調査する予定である。

Ｈ地点　第35航空情報隊　田並基地

遺跡の所在地は串本町有田と同田並の間の旧国道沿いである。遺跡は米軍の史料に記載されているようである[38]。『戦史叢書第019巻　本土防空作戦』（防衛庁防衛研修所戦史室 1968）に記載が無いことから潮岬基地の分屯所であった可能性も考えられる。住民の方によると陸軍の通信施設があったらしいとのことであった。現地調査および住民の方の証言をもとに遺構分布図（図12）を作成した。

遺構は、住民の方が陸軍砲台跡と呼ぶ石垣にて内面を補強した幅約８ｍ、奥行き約４ｍの方形窪地と電気絶縁用の碍子が見られたが（写真16）、一面藪に覆われ全容を把握するに至らなかった。

串本町教育委員会の田村浩平氏によると地下壕跡が遺されているという。

Ⅶ　戦争遺跡の現状と課題

今回は、2019年度の調査とは異なり陸軍のレーダー施設跡を中心に調査を行った。当初、予定していた調査を断念した面はあるものの、ある程度の遺構が遺されていたことは幸いであった。しかしながら海軍施設と比較すると陸軍施設は公文書等の史料が極端に少ないことが判明した。砲台や飛行場など歴史のある陸海軍施設跡は文献史料等も豊富であるが、小規模かつ秘匿性の高い施設跡となる遺跡の調査は僅かに残る遺構と市町村史等の文献史料、住民や関係者への聞き取り調査によって全体像を推測することになると思われるが、戦後75年が経過し当時を知る方々は高齢化が進んでいるため聞き取り調査自体が困難となりつつある。

また、戦争遺跡を文化財として扱う動きも依然低調であり、埋蔵文化財包蔵地にも指定されていない場合が多い。近世以前の遺跡と異なり、近代の戦争遺跡は表土付近に遺構があるため開発が行われると遺構は完全に消滅すると思われる。戦争遺跡を含む近代の遺跡は考古学的な重要度が低いとされてきたが、戦争遺跡も他の時代の遺跡と同様に日本、そして人類が歩んできた歴史である。今後、積極的な調査や埋蔵文化財包蔵地への指定が望まれる。

Ⅷ　おわりに

本稿は、冒頭でも述べたように2019年度の調査報告書「和歌山県沿岸の戦争遺跡と現状について」（山根惇史 2020）の続編という形で未調査の陸軍遺跡を中心に調査を開始した。今回も数多くの遺構を発見し少しでも多くの遺跡を活字として記録するという当初の目的は達成したものの、2019年度の課題であった実測精度の向上に関しては大きな進歩がみられなかったことは残念である。

しかしながら、今回の調査では2019年度と異なり各市町の教育委員会職員の方々をはじめとする多くの方に多大なるご助力を賜ることができ、大変喜ばしく感じた次第である。たとえ断片的な情報であってもパズルの１ピースのように幾つか集まれば大きな情報が得られるということを学ばさせて戴けた。今回調査した遺跡は今後も調査を継続し、どのような体裁になるかは不明であるが更なる続編を執筆させていただきたいと思う。

注

1）日本ニュース（1944）：『日本ニュース　第219号　(3) 電探訓練』/NHK戦争証言アーカイブスhttps://www2.nhk.or.jp/archives/shogenarchives/jpnews/movie.cgi?das_id=D0001300347_00000&seg_number=003（2020年9月9日閲覧）
2）無線と実験編集部（2008）：『復刻版　無線と実験401回路集』誠文堂新光社　p206
3）ファーザーのHP（2010）：「第35航空情報隊」http://www17.big.or.jp/~father/aab/FN/35FN/35FN.html#006（2020年９月９日閲覧）
4）防衛庁防衛研修所戦史室（1968）：『戦史叢書第019巻 本土防空作戦』株式会社朝雲新聞社「本土防空作戦附図第４　本土（台湾を除く）電波警戒機配置要図」
5）同上
6）同上
7）銚子市（1983）：『続銚子市史Ⅰ 昭和前期』銚子市p554
8）海軍軍令部（年不明）：『極秘 明治37．８年海戦史』海軍省　第20号の２ 大王埼仮設望楼及ひ無線電信所/国立公文書館アジア歴史資料センター　リファレンスコードC05110168100
9）海軍省,三重県大臣（1926）：『土地建物継続使用の件』海軍省　/国立公文書館アジア歴史資料センター　リファレンスコードC04015350400
10）大王町史編さん委員会（1994）：『大王町史』大王町　p926
11）横須賀海軍警備隊（1943）『昭和18年６月１日～昭和18年10月31日　横須賀海軍警備隊戦時日誌（１）』海軍省　p４　/国立公文書館　アジア歴史資料センター　リファレンスコードC08030464200
12）ファーザーのHP（2008）：「大王埼 特設見張所（戊）」http://www17.big.or.jp/~father/aab/yokosuka/daiou/daiou.html（2020年８月26日閲覧）
13）米軍（1947）：「USA-M500-86」国土地理院　地図・空中写真閲覧サービス
14）野島恭一（2004）：「第二次大戦における日本の電探兵器による防空作戦の実態～澤木修一氏の聞き取りから～」http://www7a.biglobe.ne.jp/~noji/sawaki.html（2020年８月10日閲覧）
15）防衛庁防衛研修所戦史室（1968）：『戦史叢書第019巻 本土防空作戦』株式会社朝雲新聞社「本土防空作戦附図第４　本土（台湾を除く）電波警戒機配置要図」
16）清水啓介（2017）：『東海軍管区の防空陣地』戦争遺跡研究会　p149
17）「本土防空作戦附図第４　本土（台湾を除く）電波警戒機配置要図」
18）清水啓介（2017）：『東海軍管区の防空陣地』戦争遺跡研究会　p149
19）陸軍（1945）：「97E5-C1-30」国土地理院　地図・空中写真閲覧サービス
20）野島恭一（2004）：「第二次大戦における日本の電探兵器による防空作戦の実態～澤木修一氏の聞き取りから～」http://www7a.biglobe.ne.jp/~noji/sawaki.html（2020年９月11日閲覧）
21）清水啓介（2017）：『東海軍管区の防空陣地』戦争遺跡研究会　p151
22）米軍（1947）：「USA-M500-86」国土地理院　地図・空中写真閲覧サービス
23）日高町誌編集委員会 編（1977）：『日高町誌　下巻』日高町　p479
24）防衛庁防衛研修所戦史室（1968）：『戦史叢書第019巻 本土防空作戦』株式会社朝雲新聞社「本土防空作戦附図第４　本土（台湾を除く）電波警戒機配置要図」
25）美浜町史編集委員会 編（1991）：『美浜町史　下巻』美浜町　p328
26）美浜町史下巻p328によれば防空監視所であるが防空監視哨が正しい表記である
27）美浜町史編集委員会 編（1991）：『美浜町史　下巻』美浜町　p328
28）米軍（1947）：「USA-M659-A-34」国土地理院　地図・空中写真閲覧サービス

29）岡本淨（2020）:『わたくしの故郷　なつかしき三尾』法善寺　p33
30）美浜町史編集委員会 編（1991）:『美浜町史　下巻』美浜町　p328
31）白浜町史編さん委員会（1984）:『白浜町史　本編　下巻１』白浜町　p800
32）鈴木喜徳郎（年不明）「きとはんサーバー　昭和18年　村の日記」http://www.kitohan.sakuraweb.com/jidai/shiriyo-matome/nen-piyou/no217-shiyouwa-no18nen-02.htm（2020年９月１日閲覧）に記載の年表による。
33）白浜町史編さん委員会（1984）:『白浜町史　本編　下巻１』白浜町　p801
34）白浜町史編さん委員会（1985）:『白浜町史　本編　下巻２』白浜町　p700
35）串本町史編さん委員会 編（1995）:『串本町史　通史編』串本町　p849
36）米軍（1947）:「USA-M554-A-2」国土地理院　地図・空中写真閲覧サービス
37）警戒機乙の送信アンテナは水平方向へ90°の角度にて送信するため、レーダー波の送信位置を航空機や艦船に特定されてしまう恐れがあった。
38）ファーザーのHP（2010）:「第35航空情報隊」http://www17.big.or.jp/~father/aab/FN/35FN/35FN.html#006（2020年9月9日閲覧）

参考文献

大王町史編さん委員会（1994）:『大王町史』大王町
日置川町誌編さん委員会 編（1996）:『日置川町誌　通史編　上巻』日置川町
由良町誌編集委員会 編（1995）:『由良町誌　通史編　上巻』由良町
美浜町史編集委員会 編（1991）:『美浜町史　下巻』美浜町
日高町誌編集委員会 編（1977）:『日高町誌　下巻』日高町
白浜町誌編さん委員会 編（1984）:『白浜町誌　本編　下巻一』白浜町
白浜町史編さん委員会（1985）:『白浜町史　本編　下巻２』白浜町
串本町史編さん委員会 編（1995）:『串本町史　通史編』串本町
玉田伝一郎（2004）:『平草原防空監視所　白浜戦争体験１』紀州博物館
岡本淨（2020）:『わたくしの故郷　なつかしき三尾』法善寺
防衛庁防衛研修所戦史室（1968）:『戦史叢書第019巻 本土防空作戦』株式会社朝雲新聞社
山根惇史（2020）:「和歌山県沿岸の戦争遺跡と現状について」奈良大学大学院

図の引用

国土地理院　地理院地図（電子国土Web）の標準地図（電子国土基本図 平成25年10月30日および平成26年４月１日提供開始）を元に地理院地図の作図・ファイル機能を用いて作成した。

謝　　辞

本稿の作成にあたり、奈良大学文学部文化財学科　小林青樹教授には、終始懇親なるご指導を賜りました。ここに深く感謝の意を表します。また、特定非営利活動法人　日ノ岬・アメリカ村

語り部ジュニア講師の三尾雅信氏には調査にご同行して戴くとともに関係各所との調整や有益なご助言を賜りました。紀州博物館にて学芸員をされていた玉田伝一郎氏には昨年度に引き続き貴重な写真史料などを提供してくださいました。ここに、深く感謝の意を表します。

また調査にあたっては下記の諸氏から多大なご協力がありました。ここに感謝の意を表します。
美浜町議会議員　鈴川基次氏、三尾漁業協同組合 代表理事組合長　村尾敏一氏、美浜町税務課課長　谷輪亮文氏、日高町教育課 課長　中筋天瑞氏、日高町教育課 課長補佐　田嶋宏敏氏、白浜町教育委員会 生涯学習係学芸員　佐藤純一氏、白浜町役場 総務課危機管理室室長　戒能浩樹氏、串本町教育委員会 社会教育グループ主査　田村浩平氏、和歌山市産業交流局観光国際部 和歌山城整備企画課史跡整備班学芸員　大山僚介氏、水野憲一氏、田邊貴教氏

（順不同、所属は当時）

Summary

This paper is a sequel to the 2019 research report "The war ruins and current situation in the coast of Wakayama Prefecture", and is being buried in nature and being forgotten in the Kii Peninsula coastal Kinan-Kinan area and Shima Peninsula. This is a report on the results of a field survey centered on the war ruins, which are the remains of the facility.

Based on the results of the field survey and the simple measured values by the laser range finder, we created a simple distribution map so that you can see how much remains are left in each war ruins.

From the survey results, it was found that there are many archaeological sites where the remains remain even 75 years after the war. However, many of the residents and people who knew the time were registered as demons, reaffirming the difficulty of investigating archaeological sites with little historical records and the importance of passing on the existence of archaeological sites and their history to future generations. Did.

Keywords：War ruins,Wakayama Prefecture,Mie Prefecture,Kii Peninsula,WW2

図１　三重県沿岸の調査遺跡分布図

図２　大王埼特設見張所 遺構概略図

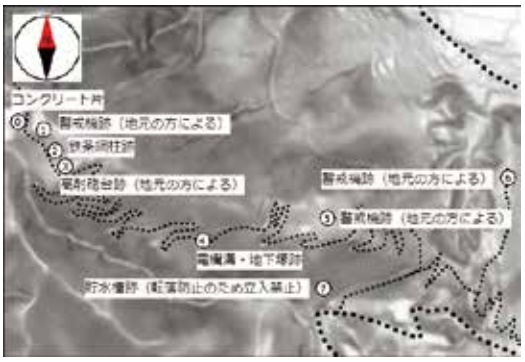

図３　多度基地 遺構分布図

図４　波切基地 遺構分布図

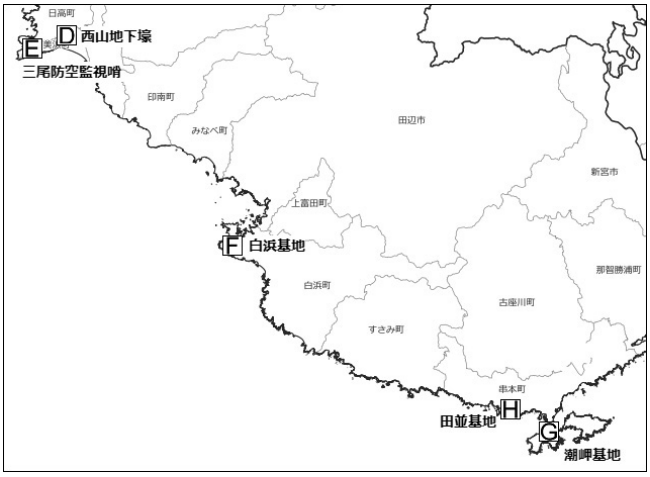

図５　和歌山県沿岸の調査遺跡分布図

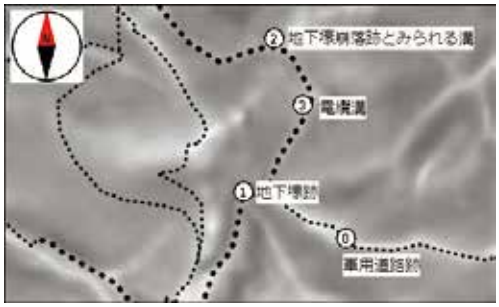

図６　西山地下壕 遺構分布図

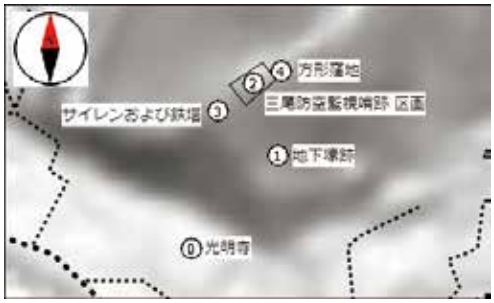

図７　三尾防空監視哨 遺構分布図

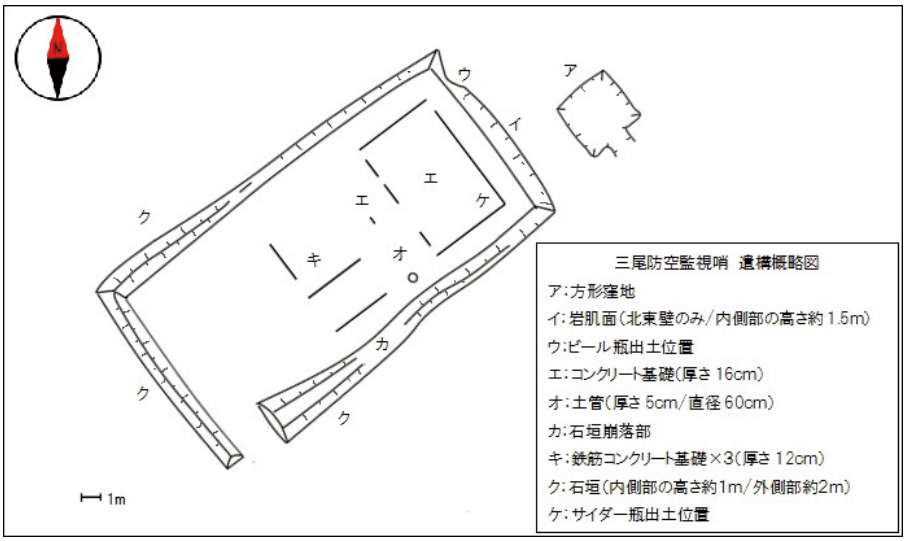

図８　三尾防空監視哨 遺構概略図

図９　白浜基地 遺構分布図

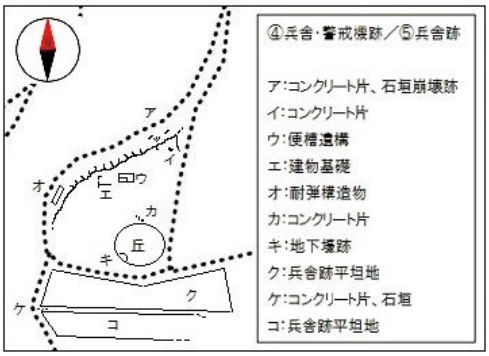

図10　白浜基地 遺構概略図

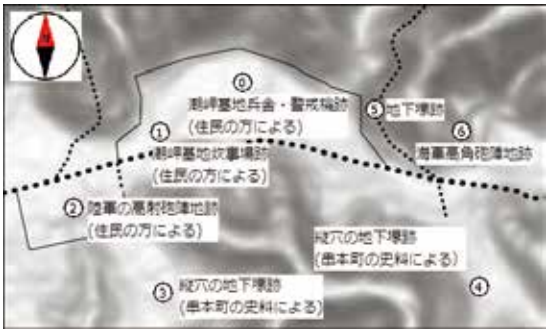

図11　潮岬基地 遺構分布図

図12　田並基地 遺構分布図

写真１　半地下式電波探信儀室 外観

写真２　半地下式電波探信儀室

写真３　指揮所跡とみられる建築物

写真４　高射砲台跡とされる土塁

写真５　地下壕跡

写真６　地下壕跡

写真７　地下壕崩落跡とみられる溝

写真８　監視哨の建造物基礎跡

写真９　方形窪地

写真10　ビール瓶およびサイダー瓶

写真11　モーターサイレン

写真12　地下壕跡

写真13　コンクリート製構造物

写真14　便槽跡

写真15　地下壕跡

写真16　電気絶縁用の碍子